

第2章 イラン革命、在テヘラン米国大使館人質事件、イラン・イラク戦争

1. 革命の成就

東京に戻ると中近東2課の所属となり、イラン担当となった。翌年79年2月にはイラン革命が成就するが、東京に戻った頃から現地情勢は急変し大変に忙しかった。

イラン現地では大規模なデモが繰り返され、これを力で抑える事の是非に迷った国王は、アズハリ軍人内閣に代えて、79年1月のはじめには再び文民のバクティヤール内閣を樹立させるもの時既に遅く、16日には国王は一時のつもりでイランを出国する。しかし、その後国王が二度と祖国の土を踏む事はなかった。2月1日にはホメイニ師が亡命先のパリから帰国して、国民の熱狂的な歓迎を受ける。ホメイニ師はバザルガン氏を暫定政府首相に任命し、ここに2つの政府が存在する事になったが、国王の後ろ盾であった軍が政治からの中立を宣言し、軍の後ろ盾を失ったバクティヤール内閣は崩壊し、革命が成就する。

日本政府の中には私も含めて、ホメイニ師や宗教界の事情に通じている者は殆どいなかったと思う。パーラビ国王の時代には徹底的に押さえられており、その名前さえ聞く事はなかった。今ではよく知られているが、ホメイニ師は国王の白色革命に反対し、そのために63年6月逮捕された。これが原因となって師の支持者と政府側の衝突になり(ホルダード月15日事件)、11月にはホメイニ師はトルコに国外追放される。師の国外亡命は革命直前まで続く。

革命成功の要因

革命は大半の国民が支持した。これに対して、私には意外な気持ちも強くあった。

オイル・ショックを契機とする経済の急成長は確かに社会に多くの問題やゆがみをもたらした。特に、大型開発プロジェクトにまつわる利権など国王周辺の有力者の腐敗は目に余った。また、伝統的なシステム・価値観の破壊も急速であり、宗教界やバザール商人など伝統勢力の苛立ち・抵抗を強くし

た。

いずれも事実であるが、他方、国民の経済生活も着実に向上していた。貧しい人でさえ、ラジオを持つようになり、また時にはイラン人のご馳走であるキャバーブ（焼肉）にありつけるようになった。少し我慢すれば、諸々の大型プロジェクトも完成して、その成果は国民に広く均てんしよう。更にいえば、国王に忠誠を誓う精鋭の軍隊も全国に網をめぐらした秘密警察もあった。

しかしこうした要素はいずれも国王の思惑どおりには働かなかった。

国民の、国王周辺の有力者の腐敗に対する怒りは大変なものであった。国民は自らの生活の改善を実感しつつも、有力者のあからさまな贅沢と不正は感情として許せなかったということであろう。

また、宗教界・バザール商人や共産党を含む左翼、学生、労働者、民族主義政党、知識人等雑多な勢力が反国王の一点だけでまとまる中で、ホメイニ師を中心とする宗教界の役割は、革命を烏合の衆の運動として終らせない上で大きかった。革命成就後の政治闘争は、宗教界のホメイニ派が、宗教界の穏健派グループや世俗的政治グループを粛清する過程と言っても過言ではない。

更には、旧体制の中心である国王がガンを患い、将来への展望を描ききれないままに強気と弱気を繰り返して一貫した対応措置が取れなかった事も革命を抑えきれなかった要因として指摘される。こうした国王の下、軍としても前面に押し出された時点では、大波のごとき国民のデモに発砲し続ける事はもはや不可能であった。

IJPC（イラン・日本石化計画）

私とは言えば、東京で現地情勢の分析やまとめ、国会答弁の作成、現地邦人の保護の問題など山ほど仕事があった。まだ、土日2日休暇制度ではなく、土曜は半日出勤の時代であったが、月に200時間以上の超過勤務をした時もあった。起きているときはいつも職場にいたようなものである。そんな生活の連続で体調を崩し、2月11日、革命成就の日はどうとう起き上がれずに欠勤した。

イラン革命に伴う混乱の中、沢山の問題が生じる。その中で、日本として

一番困った問題が IJPC の扱いであった。南部のバンドル・シャープールに三井グループが巨大な石化プラントを建設し、革命の時点では工事の 85%は完成していた。革命前の工事の最盛期には 4000 人からの日本人関係者がイランに来ていた。文字どおり日・イラン関係のシンボルであった。これが革命で工事が中断し、どうするかが問題となった。工事の停止期間が長引けばこれは即コストに跳ね返るし、そもそも今後イランは安定していくのか、反革命の可能性はどうか、また、革命政権は大型プロジェクトの国有化にも言及している。国有化の心配はないのか。イラン政府および三井グループは本プロジェクトに日本政府の資金協力を求めていた。政府としてもイランがもはや王制に戻る可能性は少ないとの見通しの下に、バザルガン政権を強化していくことがイラン安定化への道と考えて、IJPC 支援に意義を見出したものの、そのためには今後の政治・治安情勢、新政府の経済政策等確認しておくべき点が沢山あった。

そこで小長通産省経済協力部長（その後通産次官・アラ石社長など歴任）を団長に各省や日本輸出入銀行の関係者からなる政府調査団を派遣して直接現地を視察し、責任者から話を聞く事になった。私も、外務省の担当者として、またペルシャ語の通訳として一行に加わった。

調査の結論を言えば、IJPC を国家プロジェクトに格上げして完成させるべしという事になった。

いろいろ懸念も残るが、今後の政治・治安情勢も何とか持ちこたえるであろう、また国有化はしないと言質も得られた。

調査団がこうした結論を導くにあたってバザルガン首相との会談が大きかった。

国民戦線の指導者として既に 50 年代にその名を知られた老政治家は、私たち一行が首相官邸を訪れたとき、暫くの間隣室で横になって休んでいたようである。会談は私がペルシャ語で通訳して行われたが、小柄でもの静かな老紳士の真摯な話ぶりは、調査団一行にこの人のいう事であれば信用できるとの印象を与えたと思う。もとより、首相の話をもそのまま鵜呑みにしたわけではないが、その心象は大きかったと思う。

私が通訳していて感じたのは、この人があと 20 歳若ければという事であった。革命成就是、国王という共通の敵を前に結果的にはいとも簡単に実現

してしまっただが、問題は共通の目標がなくなって、雑多な革命参加勢力をどうまとめていくかである。ホメイニ師一派は、その困難さを知っていたがゆえに、とりあえず各勢力に受入れ可能な実績のある民族派の指導者を顔として持ってきたのであろう。バザルガン氏もそうした状況を承知の上で首相職を引き受けて、国民一体の政権造りに努めたのであろうが、自らのリーダーシップで諸勢力を纏め上げるには荷が重すぎたようである。我々の会談前に横になっていたと聞いてそう思った。

IJPC の工事再開に向けた作業は進んだが、ここに思わぬ伏兵が現れた。80年9月、イラクによる戦争である。IJPC の現場でもイラク機の攻撃を受けて、工事の続行は不可能となった。その後工事復興のめどが立たないまま、膨張する資金需要に対応不能となって、IJPC は完成を見ることなく解散される事になった。撤退過程は関係者にとって長い苦しい作業であった。

バザルガン首相であるが、79年11月、テヘランで学生たちが米国大使館を占拠し米国の外交官を人質に取った。バザルガン首相はこれを非難し解決に力を尽くしたが、ホメイニ師が学生たちを支持するに及んで、首相を辞任する羽目となった。

2. 在テヘラン米国大使館人質事件、イラン・イラク戦争

在テヘラン米国大使館人質事件とイラク・イラン戦争という2つの予期せぬ出来事が、革命政権の性格を決定し、また、雑多な革命勢力の中からホメイニ師を中心とする宗教界急進派を政権の中核に押し上げていく事になる。

「ホメイニ師に従う学生」の一団が、テヘランの米国大使館を襲い外交官を人質にとって占拠した事件で、事前にホメイニ師が学生達に指示を与えたことはないと思われる。しかし、事件後テヘラン市民を始め国民の熱狂的な支持を見て、ホメイニ師は学生たちの行動に明確な支持を与えた。

大使館を占拠した学生たちは、大使館内に残された米国政府の書類を丹念に修復して米国のイラン支配の実態を明らかにしようとする。米国の外交官たちは、襲撃後直ちに書類の切断にかかるから、大方の書類は粉々に切断された。学生たちはそれら文書の切れ端をつなぎ合わせて再生した。気の遠くなるような作業であり、その執念深さには恐れ入る。再生された書類は順次公表されたが、そうした作業を通じて学生たちは米国のイラン介入の事実

確信を深めていくし、そうした学生の中から政府、特に外務省の幹部や軍事治安部門の幹部が輩出されていくから、その後の反米を軸とする外交安全保障政策が決定的になっていく。また、こうした急進的な対外政策が政権への忠誠の踏み石となって、政権中枢の一体性を強めていく。真っ先に振り落とされたのはバザルガン首相、ヤズディ外相に代表されるリベラルな民族主義派であった。

人質事件は、途中米国の救出作戦が失敗に終るなどした後、444 日後に解決、全員が釈放される。

その時点では、革命政府にとってより重大で、しかも国民の求心力を集められる課題が出現していた。イラクによる戦争である。

サダム・フセインは、絶頂時の国王に煮え湯を飲まされて以来、反撃の機会を狙っていた。革命前後の国内的混乱と米国人質事件によるイランの国際的孤立は、格好の機会と見えたのであろう。どう見ても状況はイランに不利であった。しかし、祖国の危機は、少なからぬイラン国民をホメイニ師の下に再び結集する契機になったのも事実である。イランにとって勝てる戦争ではなかったが、負けないだけの力は残っていた。ホメイニ師を中心とする宗教界急進派は、革命を守るための戦争遂行を大義として、自らを中心とする国の体制造りを進める。革命防衛隊や革命建設隊といった革命組織、被抑圧者財団など準政府組織を治安や行政の中心として活用していく。これら組織は、戦争の遂行のみならず、革命に参加した諸勢力の追い落としや自らの支持勢力への手厚い保護といった面でも力を発揮していくのはいうまでもない。

3. 私のしたこと、考えた事

私は、81年の夏から中東2課を離れて、円借款を担当する課に移り、インド・パキスタンを中心とする南アジアへの有償資金協力(円借款)を担当する事になった。83年9月、二度目のイラン大使館勤務となるまでの間、東京では中東2課及び有償資金協力課時代を通して休日には私はある作業に没頭した。

革命は、驚くほど多数の国民が支持し、革命の成就是、国民の間に大きな開放感を生んだ。それは「テヘランの春」と呼ばれ、その一つの現象として国王時代抑えられていた諸々の非合法組織が姿を現し公然と活動をするよう

になった。同時に、非合法組織の国王時代の活動を伝える諸々の文書がいっせいに公表された。

私には、最初のテヘラン勤務時代、こうした舞台裏での動きが殆ど見えなかった。その結果、国王体制の行く末についても見通せず、また、革命後の体制についても殆ど理解できず専門家としては失格であったとの思いがある。

そこでまず、大使館から送られてくる現地の新聞（ペルシャ語）にこうした文書が現れるたびに、出来る限り目を通し、これまで見過ごしてきた事実を改めて勉強することにした。そうするうちに、文書のうち面白いものは翻訳して残し、併せて、世の中にも発表しようと思った。当初、中東調査会の隔月報に翻訳を掲載してもらったがある程度の分量となって、一冊の本にまとめる事になった。これが中東調査会刊、『イラン、1940-1980、現地資料が語る40年』であり、ここには、1963年にホメイニ師がコムで行った国王批判の演説（これがその後の同師の逮捕・国外追放に繋がる）を始め、国民戦線、ツーデ党（共産党）、モジャヘディン・ハルク他の政治グループの綱領や活動方針などを収録した。

また、現地紙を丹念に追っていると、そのほかにもいろいろ面白い記事に出くわす。

その一つが、イギリスの外交官夫人が記した日記のペルシャ語訳の連載である（エッテラート紙）。19世紀の半ば、ほぼ4年間にわたって、夫である駐イラン・イギリス公使ジャスティン・シール大尉に同行して現地に滞在した同夫人の現地見聞録であるが、トルコからザグロスの山々をロバの背に据えられた行李の中に閉じ込められて移動する赴任の様子から始まって実に興味が尽きない。特に現代イランで宗教的規律が強まる中で、シール夫人の描く当時のテヘランやイランの様子が何と今と相似している事か、驚くばかりである。興味が尽きないばかりでなく、ペルシャ語としても立派な翻訳であり、私のペルシャ語の勉強の意味でもこれを日本語にしてみる事にした。幸い、私の翻訳は、日本イラン協会の月報に掲載してもらえる事になり「シール夫人回想録」と題して、81年5月から48回にわたって連載された。

改めて知るイランの事情も少なくなかったが、東京で勤務する中でペルシャ語の能力をどう維持するかとの観点からも作業の効果は大きかったと思う。

「シール夫人回想録」の英文原典をペルシャ語に見事に翻訳したのは、アブ

ー・トラビアン博士である。私は博士とは面識がなかったが、東京の勤務を終て、再びイラン勤務となった際、真先に、エッテラート紙の関係者などに頼んで博士の消息を求めた。程なくして突き止めることが出来たが、歯医者さんであった。私が、邦訳の経緯を伝えると大層喜んでくれた。